
THE
VVITCH
A New-England Folktale
PARTS & LABOR RT FEATURES ROOKS NEST ENTERTAINMENT MAIDEN VOYAGE PICTURES AND MOTT STREET PICTURES
PRESENT IN ASSOCIATION WITH CODE RED PRODUCTIONS SCYTHIA FILMS PULSE FILMS AND SPECIAL PROJECTS
A ROBERT EGGERS FILM ANYA TAYLOR-JOY RALPH INESON KATE DICKIE HARVEY SCRIMSHAW ELLIE GRAINGER LUCAS DAWSON "THE WITCH" MARK KORVEN EDITOR LOUISE FORD
CRAIG LATHROP JARIN BLASCHKE LINDA MUIR KHARMEL COCHRANE JOHN BUCHAN C.S.A. JASON KNIGHT C.S.A.
JOEL BURCH ROSALIE CHILELLI LAUREN HABER LOURENÇO SANT' ANNA SOPHIE MAS MICHAEL SACKLER JULIA GODZINSKAYA CHRIS COLUMBUS
ELEANOR COLUMBUS ALEX SAGALCHIK ALEXANDRA JOHNES JONATHAN BRONFMAN THOMAS BENSKI LUCAS OCHOA
JAY VAN HOY LARS KNUDSEN JODI REDMOND DANIEL BEKERMAN RODRIGO TEIXEIR ROBERT EGGERS
© 2015 Witch Movie, LLC. All Rights Reserved.
ウィッチ

近年まれに見る実に不気味なホラー映画。

～ TIME OUT NEW YORK ～

圧倒的な評価を得た、最も美しく、最も恐ろしい映画『ウィッチ』

☆ サンダンス映画祭　監督賞
☆ インディペンデント・スピリット賞　最優秀初監督作品賞
☆ インディペンデント・スピリット賞　最優秀初脚本作品賞
☆ オースティン映画批評家協会　最優秀初監督作品賞
☆ ボストン映画批評家協会　最優秀新人監督賞
☆ シカゴ映画批評家協会　Most Promising Filmmaker 賞
☆ エンパイア賞　最優秀新人女優賞
☆ エンパイア賞　最優秀作品賞
☆ ゴールデン・トマト賞　最優秀ホラー作品賞
☆ ゴッサム賞　Breakthrough Actor 賞
☆ ロンドン映画祭　Sutherland Award 賞
☆ ニューヨーク映画批評家オンライン　最優秀新人監督賞
☆ セントルイス映画批評家協会　最優秀ホラー / S F 作品賞
☆ トロント映画批評家協会　最優秀初監督作品賞
☆ ブラム・ストーカー賞　最優秀脚本賞
（他多数受賞）

世界中の映画祭でファンが大熱狂した映画『ウィッチ』

Sundance Film Festival／Karlovy Vary International Film Festival／Melbourne International Film Festival／Toronto International Film Festival／Sitges International Fantastic Film Festival／Dracula Film Festival／London Film Festival／New Hampshire Film Festival／Sofia Independent Film Festival／Celluloid Screams: Sheffield Horror Film Festival／São Paulo International Film Festival／Leeds International Film Festival／Cork International Film Festival／Utopia Film Festival／Stockfish Film Festival／Fantasy Filmfest／Titanic International Filmpresence Festival／Imagine Film Festival／IndieLisboa Film Festival／Netia Off Camera International Festival of Independent Cinema／Horrorant Film Festival／Champs-Élysées Film Festival／Monsters of Film, Stockholm／Cinema One Originals Film Festival

CAST

アニヤ・テイラー＝ジョイ『スプリット』
ラルフ・アイネソン『トゥルーナイト』／**ケイト・ディッキー**『プロメテウス』
ハービー・スクリムショウ／エリー・グレーンジャー／ルーカス・ドーソン

STAFF

監督・脚本:ロバート・エガース

製作:ジェイ・バン・ホイ『やさしい嘘と贈り物』、ラース・カスダン、ジョディ・レドモンド、ダニエル・ベッカーマン『ペイ・ザ・ゴースト　ハロウィンの生贄』、ロドリゴ・テイクセラ
撮影:ジェイリン・ブラシケ／編集:ルイーズ・フォード／音楽:マーク・コーヴェン『キューブ』／キャスティング:カーメル・コクラン／美術:クレイグ・ラスロップ
衣装:リンダ・ミューア『グレン・グールドをめぐる32章』、『エキゾチカ』／提供:A24『ムーンライト』　

2015年／米国／英語／カラー／93分／ビスタサイズ／ドルビー・デジタル／原題:THE VVITCH／字幕演出:インジェスター／配給:インターフィルム／宣伝:シナジー・リレーションズ／G

http://www.interfilm.co.jp/thewitch/


闇だけが少女を救う・・・

全米で大ヒットした
新感覚のダーク・ファンタジー・ホラー

貴方はまだ、本当の"魔女映画(ウィッチ)"を知らない…。

INTRODUCTION & STORY

解説

"ヘンゼルとグレーテル、赤ずきんちゃんを彷彿させる"グリム童話のダークな部分が永遠の悪夢になったような怖さが評判となり、全米で大ヒットしたサンダンス映画祭監督賞受賞作品『ウィッチ』。本作は人間の苦悩と葛藤、誰もが持っている闇をむき出しに描き、数々の有名映画賞を受賞、全世界２４の映画祭に招待され、ファンの圧倒的な支持を獲得した新感覚のダーク・ファンタジー・ホラー！監督のロバート・エガースは当作品で、サンダンス映画祭監督賞を受賞。定評ある演出で次回作は、ホラー映画史に残る『吸血鬼ノスフェラトゥ』(1922)のリメイクの監督に大抜擢され、今や新鋭監督として最も期待される存在となった。主演のアニヤ・テイラー＝ジョイは本作での圧倒的な存在感と評価でM・ナイト・シャマランの『スプリット』のヒロインへと抜擢された。ハリウッドの新たなるふたつの才能と近年最高・最上の恐怖映画が遂に日本に上陸する。

物語

愛する娘は魔女なのか—

1630年、ニューイングランド。父ウィリアム(ラルフ・アイネソン)と母キャサリン(ケイト・ディッキー)は、5人の子供たちと共に敬虔なキリスト教生活をおくる為、森の近くの荒れ地にやって来た。しかし、赤子のサムが何者かに連れ去られ、行方不明に。連れ去ったのは森の魔女か、それとも狼か。悲しみに沈む家族だったが、父ウィリアムは、美しい愛娘トマシン(アニヤ・テイラー＝ジョイ)が魔女ではないかと疑いはじめる。疑心暗鬼となった家族は、やがて狂気の淵に陥っていく…。

人の心に深く切り込むホラー作品とは、
社会が抱く闇と向き合い、
そして己の心の闇と向き合うようなものである。
(ロバート・エガース監督)















『ウィッチ』

プロダクションノート

『ウィッチ』は監督・脚本を務めたロバート・エガースの長編デビュー作だ。エガースは魔女狩りという過去の悪夢に現代的な解釈を加えて本作を創り上げた。作品の舞台となった時代には、神を恐れ敬う民衆が魔女の存在を信じており、伝統的な呪術やまじないを操る女性たちは教会の脅威となり迫害され、子どもが死ぬと村はずれに住む老婆が殺したと信じられていた。『ウィッチ』は、人里離れて暮らす敬虔な清教徒の一家に焦点を当て、彼らの信仰心が森に対する潜在的恐怖によって破壊されていく様を描き出す。製作陣の非常に繊細かつ巧みな技術により、作品の随所に恐怖感あふれる表現が織り込まれている。2015年のサンダンス映画祭において監督賞を受賞した本作は、ホラー映画というジャンルに新たな旋風を巻き起こした。観客を戦慄させることに成功した『ウィッチ』は、その年に人々を最も恐怖に陥れた映画の１つとして評価された。「音や映像で観客を戦慄させるシーンは、本作の面白さを構成する大事な要素だ。しかし人生について問いかける重要な部分ではない」とエガースは言う。そして更にこう強調する。「人の心には明るい部分と同時に暗い部分もあり、自分自身の本質を知るには闇の部分まで深く掘り下げなければならない。人の心に深く切り込むホラー作品とは、社会が抱く闇と向き合い、そして己の心の闇と向き合うようなものである」

PRODUCTION NOTES

ロバート・エガースと『ウィッチ』

『ウィッチ』でエガースは、女性がしばしば闇と邪悪の象徴とみなされた時代（一部の抑圧的な社会では未だにこの考え方が残っている）の迫害と清教徒信仰とを、スクリーンの上でよみがえらせたかった。彼が言うところの「闇の女性性」に魅惑され、魔女伝説を現代生活というプリズムを通して探求しようとしたのである。「セイラムの影は、現代の我々の無意識にもはっきりと存在している」とエガースは言う。「我々は、それと同じ、あきらかに時代遅れで醜い思考のサイクルにとらわれている。魔女は今なお未知の闇の表現だ。人々が指差し咎めるものなのだ」



エガースはホラー映画を見ながら成長した。とりわけユニバーサルの古典ホラー、英国ハマー・スタジオ作品、1950年代半ばから1970年代の雰囲気たっぷりのホラーを好んだ。また、『カリガリ博士』やF.W.ムルナウの作品のようなドイツ表現主義のサイレント映画にも惹きつけられ、スウェーデンの映画作家イングマール・ベルイマンが描く哲学的なドラマにも耽溺した。



「僕にとってベルイマンは、誰よりも鮮やかなホラー映画監督だ」とエガースは話す。「ホラーとカテゴライズされるような三本ばかりの映画のことだけを言っているんじゃない。例えば『叫びとささやき』における心理的・感情的な拷問は、これまでに見た中で最高に怖い映画の１本だ」
エガースにとって、『ウィッチ』の恐怖の原点を感情的・心理的な苦闘というかたちで表現するのは極めて重要なことだった。



魔女に関する調査

映画製作の話が具体的になったのは５年以上前であり、事前調査と脚本執筆には入念な撮影やポストプロダクションと同じくらいの力が注ぎ込まれた。エガースはまず脚本に集中し、とりわけ登場人物の話し言葉、平凡な農家の人々のリアリスティックな会話を作ることに注力した。執筆中、言葉や時代の持つ精神やリズムに浸るため、彼はシェイクスピア作品を読みなおし、ジャコビアン時代（※1600年代初頭）の言葉のアクセントを意識した。さらに、同時代の資料、民間説話や魔女のパンフレットなどから抜き書きも作って、当時のタブロイド紙ともいうべきもの、裁判の記録、ジュネーブ聖書（※16世紀の英訳聖書）、清教徒が書いた日記などを撮影用台本に取り入れた。映画の中で唱えられる祈りも、実際に使われていた清教徒の祈りの手引きから引用した簡略版である。「映画の中で子どもたちが口にする言葉の多くは、コットン・マザーやサミュエル・ウィラードによる、当時のニューイングランドでの魔術や悪魔憑きについての記録から直接引用されたものである」と彼は説明する。

憑依に関する企画の調査をする中で、エガースは自身がその話にとりつかれているのを感じた。マサチューセッツのエリザベス・ナップという、引きつけや痙攣（現代ならホルモンのせいだとされるであろう）を起こした少女の話である。地元の牧師が彼女の状態を調べにくると、エリザベスはヒステリーを起こし、権威者たちは彼女は悪魔憑きだと結論した。「こうした魔女伝説について、現実の記録とおとぎ話の両方から探求したかった。あのころは、そのふたつのあいだの差は曖昧だったんだ」とエガースは話す。「ニューイングランドで集中して調査を行ったところ、何度も同じ物語やディテールがくりかえされるのを聞かされた。エキゾチックで原始的で、意表をつくものでありながらシンプルな物語を。そういった信仰が存在する社会の中にいれば、その話は強力な力となってコミュニティを支配する。これが物語の重要な構成要素となった」

エガースが脚本の下書きを一度書いて、その後に制作会社のパーツアンドレイバーからラース・ヌードセンとジェイ・バン・ホイが加わり、物語を磨きあげた。もう１人のプロデューサーであるジョディ・レドモンドが、マサチューセッツで1627年ごろのプリマス湾植民地の風俗を保存している「プリマス・プランテーション」に連絡を取り、製作への協力を求めた。エガースはプランテーションや植民地の村、図書館に足繁く通い、物語の舞台となった地域における当時の建築様式、ウィリアムと家族のような人々が住んだであろう田舎の住居の煙突から汚れた床までをつぶさに観察した。「『ウィッチ』で表現した1630年代のニューイングランドは、プリマス・プランテーションの協力なしでは実現できなかった」とエガースは言う。「初期のイギリス人入植者にまつわる最良の資料の集積所だった」

奇跡の新星

アニヤ・テイラー＝ジョイ



1996年　フロリダ州　マイアミ出身。代表作：『モーガン』（リドリー・スコット製作・2016）、『スプリット』（M・ナイト・シャマラン監督・2016）　本作『ウィッチ』が全米公開されると、アニヤの演技はたちまち話題となった。英新聞の「ガーディアン紙」はアニヤをアカデミー賞候補に、米エンターテイメント紙の「ヴァラエティ誌」は「もし映画の申し子という演技者がいるとすれば、それはアニヤ・テイラー＝ジョイだ」と大絶賛した。

アニヤ・テイラー＝ジョイについて

多くの女優が主役であるトマシン役のオーディションを受けた。最年長の子トマシンは清教徒の価値観や伝統に次第に反発をおぼえ、最後には家族から悪魔と非難される。「ロンドンの街角でマッチを売っていたアニヤ・テイラー＝ジョイを見つけたみたいな話があればいいんだけど」とエガース監督は言う。「事実は、僕にはすばらしいキャスティング・ディレクターのカーメル・コクランがいて、すでにアニヤのことを知ってたんだ。オーディションをして、すぐに彼女にはトマシンに不可欠な要素があると分かった。最初はもっと素朴で野暮ったいキャラクターをイメージしていたが、アニヤはおとぎ話のような雰囲気があり、同時にリアルで地に足が着いた存在だ。一目見ただけで禁欲的な清教徒としてはうまくいかないだろうと思え、だからこそこの役にはピッタリだったんだ」とエガースは言う。

新人のテイラー＝ジョイはマイアミ生まれのアルゼンチン育ちだが、幼少期はロンドンで過ごしている。ただし母語はスペイン語である。脚本に使われているヨークシャー訛りの英語に出会う機会はこれまでなかった。「脚本を読んで、すぐに、ヨークシャーではなくヨークシャー北部の訛りだと分かった」と彼女は言う。幼少期に各地を転々として、世界中の友達の訛りをまねして遊ぶうちに、発音を聞き分ける耳を育てていたのだ。さらに彼女は『フル・モンティ』を見て勉強し、撮影時に6歳だった兄弟役のルーカス・ドーソンを頼り、訛りを上達させていった。「彼はとっても強烈なヨークシャー訛りなの」と彼女は言う。「休憩中に一緒に遊んでいるとすぐに訛りがうつっちゃって。自分の番になったら、口からすらすら流れ出してきた」



飛躍となるだろう驚くべきパフォーマンスを見せたテイラー＝ジョイは、人里離れた荒野で清教徒の思春期に直面し、肉体的・感情的な混乱を経験するキャラクターに真実味と説得力を持たせた。幼少期に各地を転々としていたため、ティーンエイジが存在しなかったことを認めているテイラー＝ジョイは、役柄自身の成長の苦しみを経験した。「あの世界では、体内のホルモン・バランスの変化についてはほとんど知られていなかったから、セクシャリティを隠し、性的成熟など起きていないふりをしていました」と彼女は言う。「私は役柄が置かれた状況と、彼女の感情が正しくあるように努めました。感情が湧きあがる度に、トマシンはその感情をしまいこまなければならない」

テイラー＝ジョイはトマシンのファッションに魅惑された。撮影終了後しばらくしても、彼女は自分が演じた役柄で使ったヘアリボンをどこに行くときにも携えていた。「彼女の激しい魂は、幾重にも折り重ねた服の下に隠されています。衣装だけではありません。彼女は清教徒の生活が理解できなかった。自分の直感にしたがったり、正しいと思うことをやろうとするたびに、やめろと、おまえは間違っていると言われるんです。本来は素晴らしい人間なのだけれど、置かれた状況の現実につねに溺れてしまう」と彼女は言う。エガースも同じく、若いスターの演技に魅了された。「スクリーンでの存在感は衝撃的だった。彼女の中で何が起きたか分からないが、彼女の演技はまるで何かにとり憑かれたようだった。頭の中で考えていることすべて、目には感情のひらめきのすべてが見える。彼女は賢くて成熟した女優であり、年齢をはるかにこえた重みある演技をする」

ラルフ・アイネソン

1969年　英国出身。代表作：『ショッピング』(1993)、『トゥルーナイト』(1995)、『シューティング・フィッシュ』(1997)、『ハリー・ポッターと死の秘宝　PART1』(2010)、『ハリー・ポッターと死の秘宝　PART2』(2011)、『ゲーム・オブ・スローンズ』(2012)『ガーディアンズ・オブ・ギャラクシー』(2014)



ラルフ・アイネソンついて

配役を決める段階で、エガース監督は結束力の強い清教徒の一家を表現するため、素のままで役を演じられるような人物を求めた。有名俳優の顔を汚くするのではなく、『ゲーム・オブ・スローンズ』や大ヒット映画『ガーディアンズ・オブ・ギャラクシー』、『ハリー・ポッターと死の秘宝　PART2』に出演していたイギリス人性格俳優のラルフ・アイネソンは当初から構想にあった。その粗削りな容貌と強い北部訛りのあるアイネソンに、エガースは脚本の執筆段階からインスピレーションを得ていた。アイネソンは、自然あるいは不自然の力から家族を守ろうと闘う苦悩する父親、ウィリアムとして最初にキャスティングされた。「ラルフはいろいろな意味でこの映画の父親だ」とエガース監督は説明する。「彼は早くからひげを生やし、髪も伸ばし、薪を割る技も身に着けた。そして撮影のために体重を落とし、カナダに着いた時は顔つきは険しく痩せこけていた。基本的に彼がそのままウィリアムだった。またアイネソンには、子供たちの演劇舞台（シェイクスピアなど）を指導した経験があった。リハーサル中に子役へヨークシャー地方のアクセントを指導する際、その経験が役に立った」

ケイト・ディッキー

1971年　英国出身。代表作：『ゲーム・オブ・スローンズ』(2011)、『プロメテウス』(2012)、『17歳のエンディングノート』(2012)、『フィルス』(2013)



ケイト・ディッキーついて

熱烈な信仰者であるウィリアムの妻、キャサリン役にはケイト・ディッキー（『ゲーム・オブ・スローンズ』や『プロメテウス』に出演）が選ばれた。エガースは、彼女のことをカナダ人プロデューサーのダニエル・ベッカーマンを通して知った。じわじわと人気が出たアンドレア・アーノルドのドラマ『レッド・ロード』での演技を見て、エガースは準主役を演じる女優は彼女しかいないと感じた。敬虔な母親は、恐怖が積み重なる中で祈りとヒステリーに退行していく。キャサリン役が決まった時、ディッキーは別の作品の役作りのために痩せこけた外見になっていた。その風貌は、ギリギリまで追い詰められる信仰者役にケイトが息を吹き込むことができると感じたエガースの直感を確信に変えた。「撮影の準備中、僕が資料として集めた清教徒の祈りの手引きに夢中になっていた。iPadに入れて持ち歩き、撮影の合間に何度も唱えていた。彼女はつねに臨戦態勢だった。あれほど巧みな演技を見せ、役にのめりこめる俳優はいないよ」

子供たちについて

エガースはイギリスを拠点としているキャスティング・ディレクターのカーメル・コクランと一緒に、ケイレブ（ハービー・スクリムショウ）と幼い兄弟のジョナスとマーシー（ルーカス・ドーソンとエリー・グレーンジャー）を演じる子役を探した。子役たちのアンサンブルは映画の見どころのひとつでもある。２人はイングランド中の学校をあたり、ノッティンガムでスクリムショウとグレーンジャーを、ヨークシャーでドーソンを見つけた。「その地方の自然な訛りで話せる子供でなければ、演技から真実味が抜け落ちてしまう」とエガースは言う。「それに、いくつかの場面の性質から、子供を出演させてもいいという保護者を見つけるのには苦労した」

エガースはyoutubeで子役たちに悪霊に憑依され苦しむ東南アジアの人々の動画を見せた。「エリーは興奮して床を転げまわり、その動画の人物のように体をよじらせていた」とエガースは振り返る。「ラルフはサッカーを例に使い、ハービーにあの場面での身体の動きを説明していた。全員の努力で場面ができあがっている。そこが映画の要なんだ。家族がすべてなんだ」とエガースは言う。事実、家族と家族愛は本作の最も重要なテーマであり、家族の団結は外部から来る力に引き裂かれてしまう。「この物語の中では家族は最悪の運命をたどる。家族のあいだの愛は本物の、信じられるものでなければならない。キャストのあいだにはそれが生まれていた」とエガースは言う。



監督の情熱に応えた制作陣

監督:ロバート・エガース

いくつかの短編で美術、美術監督、監督を務め、今回が長編デビュー作となる。サンダンス映画祭でいきなり監督賞を受賞し、他にも多くの新人監督賞、初監督作品賞、最優秀作品賞を受賞。本作で、その圧倒的な才能が認められ、ホラー映画史に残る『吸血鬼ノスフェラトゥ』(1922)のリメイクの監督に大抜擢されている。「The Tell-Tale Heart」(2008)他

『ウィッチ』のルック

光と闇のレベルを含め、映画の正しいルックを探るためエガースと撮影監督のジェイリン・ブラシケの二人はプリマス・プランテーションで調査をおこない、露出計片手に相当な時間を費やして、17世紀の植民者が住んでいた独特なコテージの暗さを研究した。当時の人々の家は、昼間は太陽の光で、夜はろうそくの炎と暖炉のゆらめく光で照らされていた。『ウィッチ』ではそのとおりに照明した。「光の揺らめきや瞬きと、陽が落ちて夕闇が濃くなるさまは、当時の人々が見ていたものだ」とブラシケは述べる。「それに真実味ある演技、衣装、現場のセットが結びつけば、観客を1630年代のニューイングランドに送りこむことができるだろう」

美術について

プリマス・プランテーションの図書館で発見された農家の建築図面をもとに、本物の家が建てられた。場所はカナダのオンタリオ州北部にある森の中で、キオスクという小さな製材の町のはずれである。美術監督のクレイグ・ラスロップの指揮のもと、細部まで１つ１つ丁寧に当時の家屋が再現された。小屋を建てるにあたり、ラスロップは窓の大きさを３割近く広げることまでした。さもなくば暗すぎて撮影ができなかっただろう。「クレイグは、セット作りにはまったくと言っていいほど妥協がなく、ほとんどのセットが本物の構造物だ。作品に出てくるセットはすべて、1630年代に清教徒の家族が使ったはずの建材で作られているんだ。手割りで作ったオークの羽目板や、かやぶきの屋根もそうだ。作品の世界に真実味と本物らしさを与えるために必要とあれば、常に当時と同じ技術と道具が使われた」とエガースは言う。

衣装デザインのリンダ・ミューア(『グレン・グールドをめぐる32章』、『エキゾチカ』で活躍)はプリマス・プランテーションに保存されている当時の衣服を調べ、またイギリスにおける大衆衣類研究に関する第一人者、スチュアート・ピーチィから助言を得た。こうして得たデザインをもとに、ミューアはウールと麻を使い、映画制作の全ての工程において当時と同じものを再現しようというエガースのこだわりに応えるかたちで、すべて手縫いで衣装を作った。こうして作られた衣装は、重い上に、かなり動きが制限されるものであり、大人の役者たちにとっても厄介だった。撮影の過程で、農場の動物と、深い森と、そしてお互い同士と、取っ組み合わなければならなかったからだ。「衣装を着るたびに“当時の女性たちはどうやってこれを一人で着ていたのだろう”と不思議に思いました」そう語るのはテイラー=ジョイだ。「少なくとも二人がかりで着せてもらわなければなりませんでした。でも二週目には自力で着られるようになり、清教徒の女性として正しく身繕いできることに誇りを感じるようになりました」

また、当時のコミュニティにおいて、女性の役割がどれだけ限られたものだったかを理解するのにも、衣装が役だったそうだ。清教徒の時代は、制約と抑圧がそこかしこにあった。それは多くの場合、女性を縛るものだった。「わたしたちの衣装から、当時の男性と女性の違いがよくわかるでしょう」とテイラー=ジョイは言う。「大きくてゆったりしたズボンを履いた男たちは、子供も大人も、何だってやりたいようにできます。ところがわたしのほうは、きつくて息をするのも動くのもままならないような服を着て、必死で走ったり暴れたりしてたんですから。まっすぐ立つので精一杯」



音響について

まず何よりもホラー映画である『ウィッチ』は自然の世界に深く浸されており、音楽とサウンド・デザインには畏怖を呼び起こし、超越的でありつつ邪悪な要素がすべて等しく求められた。「自然音はつねにそこにある。それもうるさく」。エガースはこう説明する。「正しい音を集めて、木々のざわめきや床のきしみ、小川の流れ、甲高い風の音などを使って、濃密な環境音を創りだす」。本作の音楽を担当したマーク・コーヴェンは音楽史に深い造詣があり、この時代の音楽についても詳しいだけでなく、不気味で異様な雰囲気作りも得意である。彼はエガースと密に連携し、実際に清教徒たちが歌った17世紀の賛美歌の音楽を不協和音へと変貌させ、そしてときには、映画のもっとも恐ろしい場面ではヒステリックな無調音となって恐怖を更に大きいものとしている。

撮影について

『ウィッチ』のクルーは、オンタリオ州北部の森の最奥で26日間にわたる撮影を行った。エガースが幼少期を過ごしたニューイングランドの森林地帯に驚くほど似た土地である。ストローブマツ、ツガなどの木々が、森の広大さや畏怖、奥深さを醸し出し、ひとつの役を担っていた。カナダでは林業が盛んなので、スタッフは人里離れた人跡未踏の森を探さなければならず、物資の運搬は一苦労だった。近隣の町マタウォにあるモーテルに滞在している出演者やスタッフを現場まで移動させるのも。「ものすごく不便で大変な場所だったよ。Wi-Fiも携帯電波も届かないし、トイレすらまったくない」とエガースは振り返る。「それ自体が一種の魔法を作りだしていた。というのも我々自身が荒野で生きていこうとする必死で恐怖に満ちた人々だったからだ。まさにこの映画の核である、清教徒家族のように」

製作陣は、絶えず撮影スケジュール調整に追われた。「きつい撮影だったよ」とエガースも認める。「常に天気の悪い日を狙っていたから、屋外での撮影ではスケジュールの変更が絶えなかった。悪夢のようだった」。さらにブラシケがこう付け加える。「映画の中に太陽が見えている時は、その90パーセントがストーリーの流れ上、必然性がある時、もしくはその方がストーリーが引き立つ時だ。例えばトマシンとケイレブが森で野生動物を狩り、束の間の幸運を味わう場面とかね。だが雲が入ってくると、すべてがまた地獄に戻るんだ」

海外プロダクション・ノート翻訳：（株）スピリッツ・プロジェクト　　協力：柳下毅一郎

実践される魔術、救済される魔女

文：高橋ヨシキ

魔女は今でも実在する。かつてと同じように活動する者もあれば、そうでない者もいるが、魔女、および魔術は21世紀の現在も厳然と存在し、その権勢は衰えることを知らない。

20世紀は魔女の名誉が大きく回復された時代であった。長きに渡って恐怖と嫌悪の対象だった魔女は、カウンターカルチャーの興隆とともに、自然の媒介者、あるいは抑圧からの解放の象徴として新たな枠組みで捉え直されるようになった。魔女が体現する女性原理が、抑圧的で父権的なキリスト教思想を無化するものとして称揚されるようになり、黒い聖母やリリスと並んで女性解放運動のシンボルとなったのである。ウィッカ、ウィッチクラフト、ドルイド（ドルイダス）……復興異教主義、いわゆるネオ・ペイガニズムの勃興は無視できないスケールで進行中であり、日々、新たな魔女が世界中で誕生している。

ところで当然のことながら、魔術はその力に信頼が置かれている社会においてのみ効力を発揮する。アフリカや東南アジアでは、魔女や魔術師がむごたらしく処刑されるという痛ましい事件が今なお頻発しているが、それはすなわち、彼の地において魔術がその効力を失っていないことを示している。呪いによって人を病気にしたり、死に追いやることは、魔術が有効な社会においては全く可能である。『ウィッチ』の舞台となった17世紀ニューイングランドでは神権政治が行われており、魔術の実在性・有効性は疑問の余地がない現実であった。本作も多くを負っている「セイラムの魔女事件」は——アメリカ史上最大最悪の魔女裁判としてつとに有名である——、多くの場合、独善的な清教徒の暴虐、また抑圧的な社会が生んだ悲劇として語られることが多い。だが現代的な視点から読み解くだけでは、魔女や魔術が現実の脅威として社会の成員をおびやかしていた時代の「恐怖の本質」を見誤ることになろう。17世紀、新大陸のピューリタンが肌で感じた恐怖を我々は本当に理解できているのだろうか？　魔女やウィッカの「名誉回復」は、それはそれで結構なことだが、魔術の持つ暗い側面を「なかったこと」にしてしまうのは、それこそ不誠実な態度に繋がる可能性があるのではないか？

『ウィッチ』は、このような魔女をめぐる問いかけの中から生まれた作品である。低予算にも関わらず、17世紀のニューイングランドを可能な限り再現したこだわりは、魔術と呪いが共同体を覆っていた「実感」を引き出すためにそのセッティング



が絶対に必要だったからだ。撮影用のライトで煌々と照らされた瞬間、森や闇の持つ原初的で神秘的な力は失われてしまう……ろうそくのか細い光は、圧倒的な力を持つ魔術を前にしたときの祈りと同様、不確実で頼りどころがない。小さな共同体を漆黒の闇で分断する森は、人間が社会を形成するようになった太古から恐怖の源泉とされてきた(し、今も実際にそうなのだが、それを実感できる機会は大幅に減ってしまった)。映画『ウィッカーマン』(1973年)で描かれた、牧歌的で性の悦びに溢れた、一種の理想郷としての魔術社会とは対極の、暗く恐ろしい「森」は『ウィッチ』の影の主役でもある。

『ウィッチ』はまた、魔術や魔女の存在がもたらす恐怖には正当性があるのか？　という問いも投げかける。ある、というのが映画の出した結論だが、一方、それが魔術の持つ闇の力を畏れるものにとってのみ正当性がある、という注釈をつけたことで、きわめて真っ当な意見表明となっている。



また、魔術に対する恐怖によって魔女が糾弾されるのであれば、魔術によって魔女が救済されることもあり得る、という物語にも妥当性がある。魔術の嫌疑をかけられた者が魔術によって救われないのであれば、魔術の意味などというものは消し飛んでしまう。実利が伴わない魔術はまやかしに過ぎない。だから『ウィッチ』の表現はどこまでも現実的な、ほとんど即物的と言ってもいいものである必要があった。

ところで、現代の先進国に生きる、「魔女ではない」我々(筆者はサタニストだが魔女ではない)は、17世紀のピューリタンが肌で感じた魔術の恐怖から完全に脱却しているといえるだろうか？　ある統計によれば、アメリカ人の57％は悪魔の実在を信じている(YouGov、2013年)。日本においても、ありとあらゆる種類の占いが横行していることを考えると、アメリカの状況が決して対岸の火事ではあり得ないことがよく分かる。独自のエクソシズムや「魔女狩り」で命を奪われる事件というものも、国や宗教を問わずよく聞く話である。かつて人々は科学技術が発展し、教育が行き届くことで、魔術に対する恐怖は消え失せるのではないかと期待したが、そうではなかった。一掃されるはずだった魔術は密かに日常生活に侵入し、解き放たれる時をいまかいまかと待ち続けている。17世紀のアメリカと同様、人間はいまだ魔術の前に無力なままなのである。



CAST & STAFF

WRITTEN & DIRECTED BY	Robert Eggers	監督・脚本：ロバート・エガース
PRODUCED BY	Jay Van Hoy	製作：ジェイ・バン・ホイ
	Lars Knudsen	ラース・カスダン
	Jodi Redmond	ジョディ・レドモンド
	Daniel Bekerman	ダニエル・ベッカーマン
	Rodrigo Teixeira	ロドリゴ・テイクセラ
CINEMATOGRAPHY BY	Jarin Blaschke	撮影：ジェイリン・ブラシケ
EDITED BY	Louise Ford	編集：ルイーズ・フォード
ORIGINAL MUSIC BY	Mark Korven	音楽：マーク・コーヴェン
CASTING BY	Kharmel Cochrane	キャスティング：カーメル・コクラン
PRODUCTION DESIGN BY	Craig Lathrop	美術：クレイグ・ラスロップ
COSTUME DESIGN BY	Linda Muir	衣装：リンダ・ミューア

THOMASIN	Anya Taylor-Joy	トマシン：アニヤ・テイラー＝ジョイ
WILLIAM	Ralph Ineson	ウィリアム：ラルフ・アイネソン
KATHERINE	Kate Dickie	キャサリン：ケイト・ディッキー
CALEB	Harvey Scrimshaw	ケイレブ：ハービー・スクリムショウ
MERCY	Ellie Grainger	マーシー：エリー・グレーンジャー
JONAS	Lucas Dawson	ジョナス：ルーカス・ドーソン

発行：インターフィルム　パンフレット・プロデュース：森田一人　　パンフレット・デザイン：山本一陽（リトルフィールド）

EVIL TAKES MANY FORMS




THE
VVITCH
A New-England Folktale
PARTS & LABOR RT FEATURES ROOKS NEST ENTERTAINMENT MAIDEN VOYAGE PICTURES AND MOTT STREET PICTURES
PRESENT IN ASSOCIATION WITH CODE.RED PRODUCTIONS SCYTHIA FILMS PULSE FILMS AND SPECIAL PROJECTS
A ROBERT EGGERS FILM ANYA TAYLOR-JOY RALPH INESON KATE DICKIE HARVEY SCRIMSHAW ELLIE GRAINGER LUCAS DAWSON "THE WITCH" MARK KORVEN EDITOR LOUISE FORD
CRAIG LATHROP JARIN BLASCHKE LINDA MUIR KHARMEL COCHRANE JOHN BUCHAN C.S.A JASON KNIGHT C.S.A
JOEL BURCH ROSALIE CHILELLI LAUREN HABER LOURENÇO SANT' ANNA SOPHIE MAS MICHAEL SACKLER JULIA GODZINSKAYA CHRIS COLUMBUS
ELEANOR COLUMBUS ALEX SAGALCHIK ALEXANDRA JOHNES JONATHAN BRONFMAN THOMAS BENSKI LUCAS OCHOA
JAY VAN HOY LARS KNUDSEN JODI REDMOND DANIEL BEKERMAN RODRIGO TEIXEIR ROBERT EGGERS
© 2015 Witch Movie, LLC. All Rights Reserved.
ウィッチ